

網膜症との闘い③

糖尿病性網膜症が進行した岐阜県中津川市の小栗陽三さん(59)は03年3月、東京女子医大病院(東京都新宿区)で右目の硝子体(しょうすたい)の手術を受けた。レーザー治療でも進行を抑えられず、網膜の要ともいえる黄斑(きょうはん)がむくみ、視力が低下していたからだ。手術は成功したが、退院直前、今度は左目も見えにくくなった。

左目の硝子体に出血が起きていた。急ぎよ、左目も右目と同じ手術を受けた。

4月になって退院した。

「見えるって、すごいことだ」。両目とも視力を維持できた小栗さんは、しみじみと目の大切さをかみしめた。

環境に配慮し、デザインも優れる北欧の住宅。その奥の深さにひかれ、名古屋市中住宅輸入販売会社を立ち上げた。死ぬまでこの仕事を続けたい。視力を失い、図面や色見本が見られなくなることなど、考えられなかった。

手術後は、2週間に1度、東京女子医大に通い、診察を



カタログの住宅や色見本を見る小栗陽三さん。視力の大切さをかみしめる。名古屋市中

月1、2回 泊まりがけで通院

受けた。

ところが5月、左目の下半分が急に見えなくなった。数日後の診察で、網膜の血管が詰まっていたとわかった。血流が偶然回復していたので、固まった血液を溶かす薬を飲むだけで済んだが、「もしタミミンクが悪ければ、失明の可能性もあった」と小栗さんは振り返る。

だが、左目の状態はその後安定しなかった。04年には緑内障がわかった。高血糖で網膜の細かい血管が機能しなくなると、「新生血管」が増殖する。小栗さんは血糖の管理はよくなっていたが、目の虹彩に突然、新生血管ができ、眼圧が高まって視神経を圧迫していた。前回の診察では見つからなかったのに、症状は急に進んでいた。新生血管を冷凍凝固する緊急手術を受けて、視力を保てた。

「先生、やっぱり定期検診は大事だね」。小栗さんは、それまで以上に熱心に月1、2回の通院を続けた。

東京女子医大の診察日は、岐阜県の自宅近くの駅を午前5時51分に発車する列車に乗る。冬の朝は寒く、前日から新宿のホテルに泊まった。街路で片目を閉じ、高層ビル群の夜景を片方の目で見ては、視力を確かめた。

かつては年数回訪れていたフィンランドへの出張も控えた。急な出血など、いつ目にも異変が起きるかわからないからだ。再び視力が落ちるのが怖かった。